

学童疎開から 70 年

小柴 禧悦（化工会）

今年は学童疎開 70 年に当たり、関連する記事を目にすることが多かったように思う。私たちは疎開をしたか受け入れたか何らかの関わりを持つ世代になる。幼い頃の記憶がほとんど無く、私の記憶は疎開から始まると言っても良いかも知れない。

東京市滝野川区（現在：北区）滝野川国民学校 4 年の夏休みに学童疎開が始まり、私は埼玉県児玉郡神保原村（現在：上里町）の祖父母の家に 1 年の妹と縁故疎開した。同じ部落に母の実家（養蚕農家）もあり、伯父伯母いとこたちも居て恵まれた環境だったかも知れない。ただそれまで田舎に行った記憶もなくその生活は、母屋から離れた井戸や便所、ガスなしの環境で全く新しい経験の連続であった。

朝起きると子供たちは、背負いカゴを背負い鎌と砥石を持って土手に行き草刈りをする。家の牛馬の餌にするため農家の子たちの日課だった。祖父は非農家で牛は飼って居ないにもかかわらず、同じようにさせられた。田畑はなかったけれど河原の砂地で自家用の作物を栽培していたので、見よう見真似で刈ってきた草は積んで堆肥とした。

ここで地勢を少し述べると、家から 150 メートルほど北に土手があり烏川が流れ少し下流で利根川に合流していた。川を渡ると群馬県で赤城、榛名、妙義、噴煙を上げる浅間の山々が土手から大きく見えていた。一帯は平地で田畑が広がっていて、畑は桑畑が主だった。どの農家も養蚕をやっていて暮らしはそのサイクルに縛られていた、一例を上げればお盆は一般的な 8 月中旬ではなく 10 日遅れでやっていた（現在は中旬）。

そして昼になると子供たちは水浴びと称して川へ一斉に泳ぎに行っていた。それにも早速参加させられ禪一丁で川に飛び込み遊ぶのだが、幸い東京の学校にプールがあって少し泳げたので良かったけれど、今考えると子供たちだけで良く事故もなく済んだものだと思う。しかし草刈りや水浴びに参加させられたお陰で土地の子供たちとなじむことができたのだと感じる。

農家ではなかったが、烏川の中州の砂地を開墾した畑で陸稲やトウモロコシやサツマイモなどを作っていたので、食べ物がないと言うことはなく、それほどひどい思いはしなかった。しかし、屋敷内に生えている茗荷を味噌汁に入れられたのにはまいった。今は大好物であるが当時は食べられなかった。当然畑仕事の手伝いをさせられた。

9 月になって学校が始まり、神保原国民学校に通学した。部落の神社に生徒が皆集まり、集団で約 2 キロの道を裸足で歩いた。これはショックだった。かなり寒くなるまで裸足だった記憶がある、そのため小石につまずいて足の指の爪を剥がすことがあり、痛い思いをした、直ってはまたやるという具合で、今でも両足の第 2 指はいじけた爪が生えている。稲わらで草履を作ることを覚えて冬の履き物にした。

学校はどこも同じであまり印象に残っていないが、疎開者としていじめられた記憶もあまりない、滝野川の時が多分中の下くらいの成績であったが、程度の差があったようで苦労もせずに上位にいたせいであるかもしれない。農繁期には学校から集団で農家の手伝いになり出された、稲刈りで稲と一緒に指を切り、いまだに指に跡が残っている。また、隣の七本木村（現在は合併して上里町）にあった軍用飛行場の草刈りに行ったこともあった。

東京では空襲に備えて防火帯を作るため家を強制的に取り壊していた、借家であった家がそれによりなくなり、警察官の父だけ残り母と妹2人もやがて疎開してきて一緒になった。父が引っ越した家も空襲で焼けてしまい残した家財道具も焼け、子供時代の思い出の品が全部なくなった。

疎開先で夜空襲により遠くの空が赤くなるのを見たことがあった、ついに終戦前夜、空襲に襲われ桑畑に避難して、夜空に大きな B-29 の機影を見た、しかし村には1発の爆弾も落ちず、落ちたのは烏川であった。翌日土手でまだ燃えている油脂焼夷弾をこわごわ見に行った。中州には無数の焼夷弾があった。なぜ川だったのか謎であり、道路と間違えたのではと言う説もあった。いずれにしても幸運であった。終戦日はその光景の記憶が強く、終戦の詔勅についての記憶は定かではない。

そしてその年の11月、父が迎えに来てくれて貨車に詰め込まれ東京市板橋区（昭和22年に分離して練馬区）にあった警察の官舎（和室の2K）に帰って疎開は終わった。9才から10才にかけて16ヶ月の疎開生活であったが、この間に体験したことを列記してみると、農業：稲刈り、麦踏み、田植え、麦刈り、農機具の扱い方、肥料（人畜糞）やり、わら縄作り。養蚕：桑摘み、桑の実、お蚕さまの一生、繭の処理。自転車の三角乗り、竹竿による川船操船、薪割り、風呂の水くみ、風呂焚き、もらい湯、道祖神祭り、土葬、ノミ、シラミ、回虫、ひび、あかぎれ、しもやけ ビンタ等々。それに赤城下ろしの空っ風、浅間山噴火による降灰もあった。ほとんどが東京では経験できない事柄であった。

石油ショックを受けたときにこの疎開での経験が思い出された。疎開当時のエネルギー源は石油など無く、牛馬の力と人力であった。多分江戸時代とあまり変わらなかったのではないか。家庭の燃料は竈では麦わら、桑の枝・切り株、薪、暖房は木炭、たどん・練炭であった。土地柄から鎮守の森と屋敷林はあったが、薪の採れる森林はなかった。しかし良くしたもので、川が大雨で増水すると上流から流木が流れてくる、危険も省みず皆総出で船を出して拾い上げ、乾燥して薪にしていた。米と麦の二毛作が行われており、稲わらは俵や縄、家畜の餌などに使えるが、麦わらはそれらには適さないが良い燃料になった。とにかく自給自足、地産地消、今で言う持続可能な生活・社会を体験したことになり、いまだに体に染みついている。

菩提寺があるので、年1回の墓参、法事の機会に訪れているが、養蚕はとっくになくなり、桑畑は野菜畑となり野菜供給基地と化していて、今風の家も建ち、裸足で通学した道路は舗装され完全な車社会に変貌している。

一方集団疎開した同級生たちは、沼津市のお寺で集団生活を送った。その中にミステリ作家になる内田康夫がいた。数ある作品の中に疎開を素材とした「美濃路殺人事件」（角川文庫）があり、その自作解説に疎開についても書かれているので、一部を引用する。「成長期の最も大切な時期と一緒に過ごした仲間には、何十年経っても格別の想いがあるので、その後の学生時代や社会に出てからの友人・仲間に対するのとは比較にならない、濃密で、ある意味では悲しいほど屈折した感情が連綿としてつづいています。それはほとんど肉親に対して抱く愛憎に近いものがあるといってもいいでしょう。」

同作品の登場人物に疎開同級生の名前を使われている、その使われた一人に家が近くよく遊んだ福ちゃんがいた、家が焼けたため戦後愛知県に引っ越したが、年賀状の付き合いを続けた唯一の同級生だった。その疎開仲間は毎年旧交を温める会を開いていた。数年前に福ちゃんから上京して出席するので、出ないかと誘いを受けた。それで母校のある駒込駅近くの会場に出かけて何十年ぶりに顔を合わせ語り合うことができた。3年4ヶ月一緒だったはずだが、福ちゃん以外の同級生とはお互いに初対面のような感じだった。

こうした会が続くにはその絆の強さだけでなく、幹事を引き受ける熱心な人物の存在が重要で、ここにもその存在があった。その後も会の連絡を受けもう1度出席したが、内田康夫に会うチャンスはなかった。浅見光彦という探偵が毎回出てくる彼の著書を何冊か図書館で借りて読んだ。いまだに現役で新刊を出しているところがすごい。

さて、疎開の思い出をこうして探ってみて思うのは、色々辛いことがあったはずであるが、それが意外と思いつけない。嫌な思い出は忘れようとするから、長い年月の間に記憶が薄れてきているのであろうと思う。

学童疎開は首都防衛の足手まといを除くことと次世代の人材を温存するためと言われた国策で私たち世代は直接空襲の被害を免れることになったが、次の現実もあった。

疎開より九日帰京せし友ら十日未明の空襲に死す 高桑喜美

言うまでもないが、2級上の先輩たちが中学受験のために帰京して昭和20年3月10日の東京大空襲にやられたというやりきれない悲劇。

自分のことで精一杯で、一年生の妹に兄らしいことをした記憶はないが、同級生のいところがいつも一緒にいてくれたのが救いだった。さて、今はやっているという自分史を作る気は毛頭無いが、私にとって大きな転機になったと感じている疎開についてこの機会にまとめてみた。

戦後のことは次の一首で締めくくりとする。

戦中よりむしろ戦後がきびしかり焼けし山河の食糧難は 結城 文

以上

2014年9月19日